


鹿児島大学附属図書館・ミュージアム知覧 共同企画展



木村探元と 武家のたしなみ



平成26年度 鹿児島大学附属図書館貴重書公開

巻頭言

鹿児島大学附属図書館は、平成9年（1997）から玉里文庫などの貴重書を広く一般に公開する展示会を毎年開催してきましたが、このたびは南九州市知覧の「ミュージアム知覧」との共同企画で、江戸中期に活躍した薩摩藩のお抱え絵師、木村探元の絵画作品や著書の公開展示と、美術史の研究者による講演会を開催することとなりました。

木村探元（1679～1767）は、鹿児島市平之町で生まれ（平田橋近くに石碑あり）、幼くして絵の才能を認められ、やがて25歳で江戸の狩野派に学んだ後は薩摩に帰郷し島津家に仕えるが、島津家と縁の深い京都の近衛家や禁裏にも召された絵師でした。その作品は室町風の水墨画にとどまらず、歌人、茶人、文筆家としても活躍した、薩摩が誇る文化人でした。

このたび、武家屋敷や庭園を現在に残し、武家文化を色濃く残す知覧において、木村探元の人と芸術を偲ぶとともに、現代人が忘れがちな文化的な教養に裏打ちされた、いにしへの武家の「たしなみ」に想いを馳せていただきたいと考えます。

平成26年12月

鹿児島大学附属図書館長 野呂忠秀

江戸時代の南九州市知覧は、薩摩藩島津家一族の知覧島津家の所領でした。知覧島津家第18代当主の島津久峰は、文化人である木村探元のもとに7年間に渡り足しげく訪ね、茶道をはじめとする諸芸道について教を請い『白鷺洲』を書き留めています。久峰は、藩の重職に参画する一方、知覧の武家屋敷群を区画整備し、西側の丘に桜や楓を植林するなど、領地知覧の治政にも力を注ぎました。探元から学んださまざまな素養が、知覧の文化にも反映されているのかもしれませんが。

今年は、久峰が探元のもとを訪ね始めた宝暦4年（1754）から260年目にあたります。その節目の年に、このような展示会を「鹿児島大学附属図書館」との共同企画により開催できますことを心から感謝申し上げます。

平成26年12月

ミュージアム知覧館長 日置健作

目次

木村探元略年譜	1
絵師としての探元	
富士と探元	2
梅之図 / 粉本主義から雪舟様式、写生画へ / 中山花木図譜系	3
京都での探元	
木村探元上京日記 / 槐記 / コラム・近衛家と探元	4
琉球と探元	
探元と琉球 / 琉球漆器 / コラム・薩摩と琉球	5
歌人としての探元	
石馬集と松操和歌集 / コラム・探元と俗文学	6
茶人としての探元	
白鷺洲 / 茶道具組合会積器物名譜集	7
随筆家・書家としての探元	
三暎庵談話 / 書家としての探元	8
武士としての探元	
示現流聞書喫緊録 / 自顕流系図 / 紺絲威二枚胴具足	9
知覧島津家の文化	
知覧島津家系図 / 詩経 / コラム・知覧文庫本『島陰漁唱』	10
毅斎遺稿 / コラム・島津久峰と探元	11
知覧の庭園文化	
都林泉名勝図会	12
佐多忠直氏庭園 / 佐多美舟氏庭園 / 平山亮一氏庭園	13

木村探元と武家のたしなみ

平成 26 年度 鹿児島大学附属図書館貴重書展示

木村探元^{たんげん}は、江戸時代薩摩を代表する画家としてよく知られている。この展示会においては、画家としての木村探元だけでなく、茶の湯の宗匠としての探元、歌人としての探元、随筆家としての探元など、彼の多彩な側面を絵画、書物の展示を通じて見ていただくこととした。また、幸いに、ミュージアム知覧の協力を得て、幅広い文物の展示が可能になったことは幸いである。

今回、貴重書展示会開催に当たって、ミュージアム知覧の関係者の方々には、大変お世話になった。ここに記して感謝を捧げたい。また、展示品、図録などについてのご協力を賜った鹿児島県立図書館、鹿児島市立美術館にも感謝を捧げたい。（高津）

木村探元略年譜

年号	干支	西暦	年齢	事項
延宝 7	己未	1679	1	現在の鹿児島市平之町に、木村時喜の次男として生まれ、幼名を金平といい、後に金左衛門と改めた。
元禄 4	辛未	1691	13	鹿児島の絵師小濱常慶（狩野常信の門人）に絵を学ぶ。
元禄 16	癸未	1703	25	江戸に赴き、狩野探信の門人となる。
宝永 2	乙酉	1705	27	鹿児島に帰郷、以降、薩摩藩の御用絵師として活躍。
宝永 4	丁亥	1707	29	藩主島津吉貴の命で剃髪し、探元の名を賜わるとされる。
宝永 6	己丑	1709	31	江戸に行く途中、駿州で富士山の真景を描く。
正徳 4	甲午	1714	36	6月、中山王の慶賀典翰史・程順則が鹿児島来訪。
正徳 5	乙未	1715	37	3月、鹿児島で、探元画に程順則が賛を加える。
享保 5	庚子	1720	42	探元自画像に、北京で徐葆光が賛を加える。
享保 11	丙午	1726	48	3月、伊勢神宮参拝後、京都を訪問、近衛家久に会う。
享保 19	甲寅	1734	56	関白近衛家久に招かれ上洛、勅許によって「法橋」という位を賜る。
享保 20	乙卯	1735	57	近衛家久より「大貳」の名を賜る。
元文 5	庚申	1740	62	隠居を許される。
宝暦 4	甲戌	1754	76	12月頃、島津久峰の茶道聞書（『白鷺洲』）始まる。
宝暦 9	己卯	1759	81	これ以降、橋口某による絵画聞書（『三暎庵談話』）始まる。
宝暦 10	庚辰	1760	82	7月、島津久峰の茶道聞書（『白鷺洲』）終わる。
宝暦 12	壬午	1762	84	このころ、絵画聞書（『三暎庵談話』）終わる。
明和 4	丁亥	1767	89	没す。南林寺墓地に葬られる。

主要な参考図書

- 鹿児島市立美術館編『木村探元展 — 近世薩摩画壇の隆盛 —』鹿児島市立美術館、1987年
- 『木村探元小伝』公爵島津家臨時編輯所、1926年
- 知覧村教育會編『知覧郷土史』1926年
- 知覧町郷土史料調査委員会編『知覧郷土誌』1962年
- 南九州市教育委員会文化財課『南九州市文化財ガイドブック（知覧地区）』2010年
- 重森三玲・重森完途『日本庭園史大系』26・江戸中末期の庭（3）、社会思想社、1974年

絵師としての探元

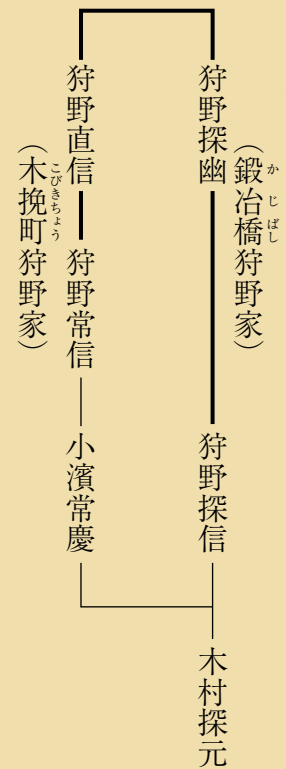


「富士山図」(ミュージアム知覧)

富士と探元

探元は25歳で、江戸に赴き、狩野探信^{かのう たんしん}の門人として27歳まで江戸に滞在している。したがって、この江戸行きで初めて富士山を間近に見たはずであり、また、江戸からも富士山は遙かに望むことができる。探元には、31歳、江戸に赴く途中で実景を描いた富士山図が現存する。深見玄岱^{ふかみ げんたい}の画賛によれば、宝永6年6月15日、探元と玄岱は、駿州江尻^{えじり}の宿に至ったところ、富士山に積もった雪がほとんど消えかけている様子が目に入った。旅の途中で絵筆もない中、紙を繕^{よじ}って筆の代わりにして描いたという。富士山を描いた探元画は、鹿児島市立美術館所蔵の「富嶽雲烟之図」(県指定有形文化財、宝暦3年、75歳の作)が著名であり、代表作となっている。探元の富士図は、狩野派の粉本^{ふんぼん}に従った探幽^{たんゆう}様式から、雪舟様式を採り入れた探元様式への変化が見られるが、本図は、尚古集成館所蔵「富士山水図」に図柄は近く、探幽様式の富士図、一方、「富嶽雲烟之図」は雪舟様式を採り入れた探元様式となる。図中に落款「甲寅秋日 黔羸探元邨^{そんし}々^し筆」、白文方印「(不明)」、朱文方印「長歌/思郢」、朱文円印「薩陽/元/圖書」とあるので、本図は享保19年、探元56歳の時の作品である。この年、探元は京都で法橋^{ほつきょう}という地位を勅許で賜っており、画家として最も華やかな時期であった。(高津)

狩野派系譜



太線は血縁

梅之図

落款「大貳法橋」、朱文瓢筆印「大貳/探元守廣/法橋」。法橋位を授かる享保19年（1734）54歳以降の作品。薄墨の破墨で梅の幹を描き、濃墨で枝、梅花を描いている。左下に重心を置き、一本の直線状の枝を中心から左寄りに下から上に描いており、二幅対の左幅である可能性がある。東京国立博物館所蔵「牧牛図」に同じ印が押されている。（高津）

粉本主義から雪舟様式、写生画へ

探元が江戸で狩野探信に入門した頃、狩野派の中心的指導者は狩野常信であった。常信によって、手本の臨模を厳格に行う粉本主義が確立されていく。したがって、探元の出発点は狩野派の粉本主義で、その様式は常信の師である狩野探幽に基づくものであった。その後、探元は狩野派をさかのぼって雪舟の様式を学び、また、日本画の新しい動向である写生にも取り組んだ。（高津）

中山花木図譜

探元の写生画に「中山花木図譜」がある。他に模本5点が知られているが、近衛家久の依頼によって作成されたと推定される近衛本「中山花木図譜」（武田科学振興財団杏雨書屋所蔵）には探元の印があり、確実に探元作品である。当時の京都における近衛家熙（1667-1736、家久の父）周辺の写生画への志向と関連して重要な作品と考えられる。「中山花木図譜」には、正徳4年（1714）慶賀使として薩摩を訪れた近世琉球を代表する文化人である程順則（1663-1735）の賛を有する着賛本と賛の無い無賛本があるが、近衛本は無賛本である。琉球から薩摩にもたらされた琉球の植物を描いたもので、佛桑花、三段花、玉簪花、千年草、名護蘭、風蘭、龍眼樹、茉莉花、美人蕉、恵美祢、黄蘭、椿、都具、木瓜、榕の15種の植物が描かれている。（高津）



「梅之図」（ミュージアム知覧）



近衛本「中山花木図譜」佛桑花、三段花（東京国立博物館『特別展一花』より転載）

京都での探元



『木村探元上京日記』(鹿児島県立図書館)

木村探元上京日記

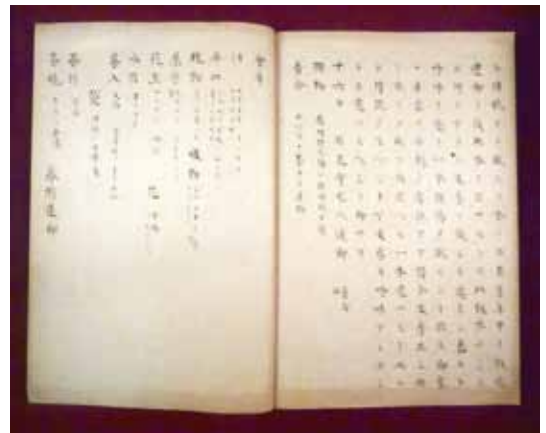
木村探元は、最初、享保11年(1726)伊勢参宮の帰りに京都で関白近衛家久(1687-1737、正室：島津綱貴娘の亀姫、継室：島津吉貴娘の満君)に謁見している。次に、享保19年(1734)10月から翌年4月まで京都に滞在し、太政大臣近衛家久に謁見、11月には、勅許により「法橋位」を授かっている。法橋は本来、僧侶の位階であったが、中世以降、医師、絵師にも与えられ、俗人の五位に相当する。京都滞在中、近衛家久御用の屏風絵や禁裏御用の衝立を奉呈し、月11日享保20年閏3月には近衛家久より「大貳」の

名を賜っている。「木村探元上京日記」は、享保19年9月14日の鹿児島出立から、翌年5月の川内の向田帰着までの出来事を詳細に記した旅日記で、江戸時代中期の旅の状況、薩摩藩士と堂上公家の関係、京都における薩摩藩の人間関係など貴重な情報に溢れている。図版は、享保19年11月27日、法橋位を賜った時の記述。(高津)

槐記

原題は「槐下与聞」。近衛家の侍医であった山科道安(保寿院)が、近衛家熙(1667-1736)の行状や談話を、見聞するまま忠実に記録した書物である。道安は、教養人であった家熙のもとに日々伺候してその言行に接しており、『槐記』は茶道をはじめとする諸道の奥義書ともなった。

図版は、同記の享保12年(1727)12月16日条。この日、家熙は中川石見守の邸宅に出かけ、会席のもてなしを受けた。そこに掛けられていたのは探元の絵に程順則(1663-1734)が讚(画面の余白に添え書かれた詩や文)を着けたものであったと、家熙の供をした道安は記録している。程順則は、琉球の外交官・学者・漢詩人であった人物で、正徳4~5年(1714-1715)に慶賀使(琉球国王が江戸幕府将軍の代替わりを祝って派遣する使者)として江戸に上ったが、その往路や帰路にて、探元筆の絵に題や讚を書いたことが知られる。石見守邸にあったという絵も、その際に着讚されたものの一枚かその写であろう。(金井)



山科道安『槐記』(鹿児島大学附属図書館・玉里文庫)

近衛家と探元記

探元の主君であった島津吉貴(当時は隠居)は、家久には舅(亡くなった妻満君の実父)にあたり、藩の御用絵師たる探元をしばらく京都に寄越してほしいという願いも聞いてもらえる相手だった。探元は、享保11年(1726)に於須磨(吉貴の妻、満君の生母)の伊勢神宮参拝に同道した際、すでに近衛家久に謁見していたので、上京した探元を引見した家久は「久しうで逢た。国元でも入道(島津吉貴)・須磨無事じやげな。此度無心を言にはるのぼつてくろふ(苦勞)な事ぢや」(「木村探元上京日記」享保19年10月23日条、振り仮名と傍注は筆者)と声をかけている。(金井)

琉球と探元

探元と琉球

現存する木村探元の自画像（小松甲川模写）には、清の徐葆光の画賛が施されている。画賛の書かれた日時は、康熙59年（1721）10月で、場所は北京である。徐葆光は、康熙58年（1719）の琉球冊封副使として、6月1日に那覇着、琉球での冊封儀礼を終えて、康熙59年（1720）2月16日に那覇を出航している。画賛が施されたのは、皇帝に帰国の報告をした北京滞在中のことである。探元が琉球を訪れた形跡は無いので、琉球人を通じて、琉球滞在中の徐葆光に画賛の依頼があったのであろう。したがって、この自画像は、薩摩で描かれ、琉球ルートを通じて、福州へ、そして北京の徐葆光のもとへと運ばれ、更に逆のルートを通って薩摩の探元のもとに戻ったことになる。（高津）



「朱塗山水図堆錦重箱」(ミュージアム知覧)



「黒漆梅螺細八角盆」(ミュージアム知覧)



「自画像」小松甲川模写(鹿児島市立美術館)

琉球漆器

薩摩藩は琉球を間接支配していたことから、様々な琉球文物が薩摩の旧家には伝承されている。展示品の琉球漆器は代表的な琉球の輸出品であり、中国から漆塗りの技法が伝来して後、高温多湿の気候が漆工芸に向いていたこと、琉球王府の保護もあったことから、独自の発展をしたものである。（高津）

薩摩と琉球

1609年、幕府の許可を得た薩摩の島津氏が琉球に侵攻する。幕府から琉球統治を委任された薩摩藩は、奄美群島を割譲し薩摩藩領とし、琉球に毎年の貢納を義務づけた。また、幕府は幕藩体制の諸規則を琉球に課し、江戸への使節派遣も行わせ、主従関係を実体化した。しかし、幕府、薩摩藩の琉球支配は、琉球が中国との冊封、朝貢関係を有することを前提としており、薩摩から琉球に派遣された武士団等も極めて少数で、琉球の政治、外交は琉球王府が自主的に行うものであった。琉球は、1653年薩摩藩の許可のもと清朝に慶賀使を送り、清に帰順する。これ以降、琉球は薩摩藩による支配の実態を隠蔽し、独自の琉球社会、文化を形成していく。薩摩藩からは、在番奉行が琉球に送られ、間接的に琉球支配を行い、鹿児島城下には琉球館が置かれ、琉球からは在番親方が派遣され、薩摩琉球交易の中心であった。（高津）

歌人としての探元

石馬集と松操和歌集

いうまでもなく、和歌や漢詩文は当時の支配層である武士にとっては嗜みのひとつであった。探元は京都時代、近衛家当主のお伴で堂上の歌会などにしばしば参加したことを語っている（『白鷺洲』）。探元の歌の師は不明ながら、おそらくは京の堂上（公家）の指導を受けたものと思われる。ちなみに探元の歌の友である美代六郎左衛門清相は、中院通躬（1668-1739）に入門している。探元の和歌の作品は、得能通昭（1729-1789）のまとめた『通昭録』巻30～35の『石馬集』に収録されている5首（重出を含めると6首）、19世紀初めまでの薩摩の和歌を集めた『松操和歌集』に収録されている11首（ただし1首は探元の娘とする本がある）が知られる。両者に共通しているのは次の1首。



『松操和歌集』（鹿児島大学附属図書館・玉里文庫）

吉野橋の芦 木村静隠

植置し君は難波の夢なれや間に風の音ばかりして（『石馬集』）

鹿児島市長田町の高野山最大乗院付近は、もと池であり、そこには初代薩摩藩主島津家久が難波から持ち帰り植えた芦が繁っていた。探元は西行の「津の国の難波の春は夢なれや葦の枯葉に風わたるなり」（新古今集、冬）を本歌として家久と芦のことを詠んだのである。八代集などの人口に膾炙した歌を踏まえた温和な詠みぶりが当時の詠歌の特徴のひとつである。探元は西行の歌を好んだようで、次のような歌も残されている。

西行法師の絵を書き、近き内其命日も来れば閏月ながら花をも手向給
へと美代清相におくるとて、
とくとくと苔の清水の苔絶へず流れての世に君や汲むらん

美代清相（前出）は六代藩主島津宗信（慈徳院）の抱守であった。周知のように西行の命日は旧暦2月16日、右の歌には「閏月ながら」とあるので、閏二月が存在した年に詠まれたことになる。元禄10年（1697）、享保元年（1716）、宝暦4年（1754）のいずれかであるが、残された探元の和歌が後半生のものが多いことを考慮すると、宝暦4年のものだろうか。鹿児島にもどってからの探元は悠々自適に日を送ったようで、『白鷺洲』には次のような狂歌も収録されている。（丹羽）

狂歌を読申候由にて、筆を被取、鳥羽の絵にて可有之由にて、
其脇に鬼を被画、又其讃に、
とやせましかくやせましと明しきて鬼らこわき年の暮哉

探元と俗文学

探元は『白鷺洲』で草紙作者の「其跡」なる人物のエピソードを伝えている（ただし広本系の写本のみ収録）。これは浮世草子作者として有名な江島其磧のこととされている。「其跡」は本屋と原稿料を定め、前金で受け取るとそれをあつという間に消費し、その後は故事来歴を考証して作品を執筆、これを繰り返している。また、博学多識で商売や相場のことにも通じているにもかかわらず、才能を商売に振り向けたらどうかと言われると、恬淡として商売は「不数寄」（不好）と答えたという。一方、『三暁庵談話』には、元禄末年に立て続けに浮世草子を執筆するものの江戸に下って無宿者として逮捕され薩摩に流された鉄舟（都の錦）が、護送途中、徒然草の講釈を行い、役人を驚かせたという話を載せる。このように探元の興味関心は俗文学およびその作者にも向けられていた。（丹羽）

茶人としての探元

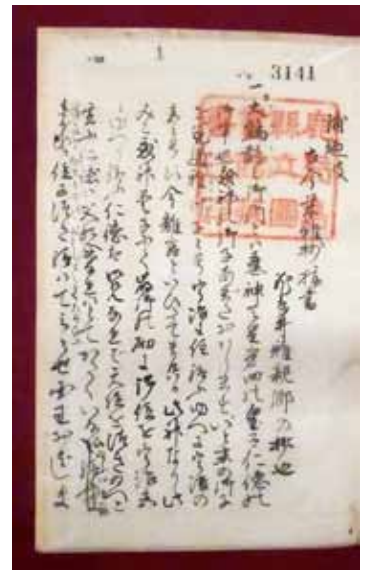
白鷺洲

本書は島津久峰^{ひさ たか}が宝暦4年(1754)より足掛け七年にわたって探元の談話を聞き、書き留めたもので、題名は中国の揚子江にある中洲の名を用いている。茶道や絵画に関する久峰の質問に対し、探元は彼の若い時代の思い出話や、江戸や京都での見聞などを語っている。茶に関するものとしては、茶人のエピソード、茶の故実や作法、茶道具の知識や心得、など多岐にわたる。「小堀殿、古田殿などなされたる事を当分は利休の事に成たる事多候由」など、小堀遠州や古田織部がおこなったことを、現在、世間では千利休のこととして理解されている、との鋭い批評が見られたり、また、「いづれ茶入は中より上に一景無之候へば不好候」というような道具類の見方が示されたり、探元の好みや美意識も汲み取ることができる。また、

『浦廻波』『三暁庵談話』にも共通するのは、知識や情報が豊富であることと、風流、風雅の世界に遊ぶ人々のエピソードが多く語られることである。(丹羽)



『白鷺洲』
(鹿児島大学附属図書館・玉里文庫)

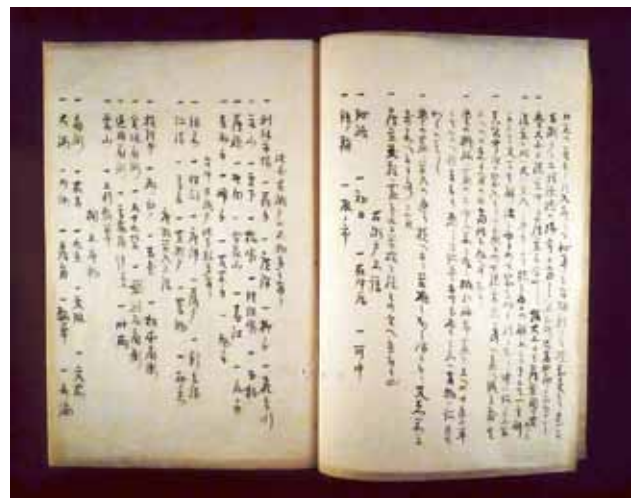


『浦廻波』(鹿児島県立図書館)

茶道具組合会釈器物名譜集

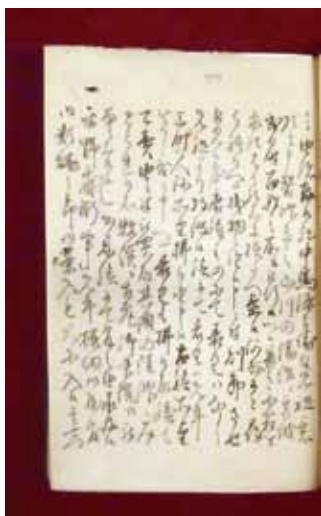
由緒ある名品として宗匠によって選ばれた茶道具を「名物」と称する。本書はそうした「名物」を道具の種類によって分類、紹介した書物の一つである。具体的には、茶碗、茶杓、茶筌、茶入、水指、蓋置、釜といった点茶に直接関わるものはもちろんのこと、花入、香合、掛物といった床飾り、刀懸け、煙草盆、煙草入、文庫などの備品、さらには石灯笼や燈道具といった照明具にまで及んでいる。道具を選定した宗匠としては、千利休、千道安(利休長男)、千宗旦(利休の孫)、千仙叟(宗旦四男)、久田宗全などが見えるほか、東山殿(足利義政)の好みのもものも取り上げられている。

(丹羽)



『茶道具組合会釈器物名譜集』
(鹿児島大学附属図書館・玉里文庫)

随筆家・書家としての探元



『三晩庵談話』(鹿児島県立図書館)

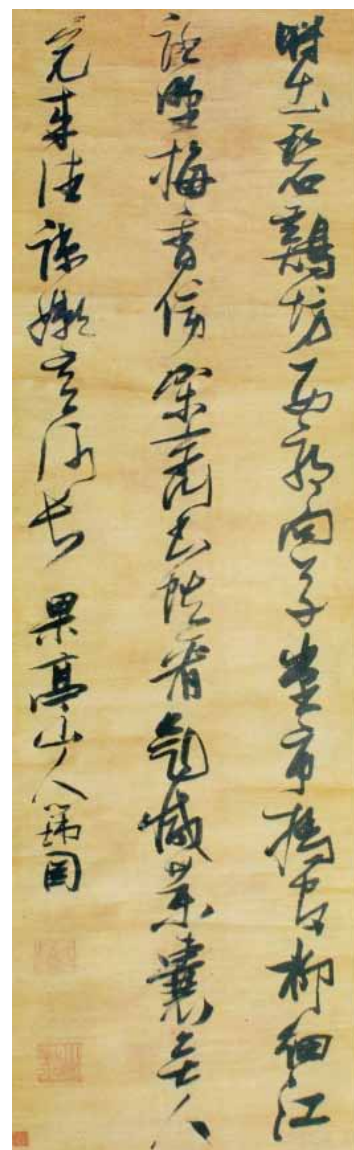
三晩庵談話

木村探元の随筆集である。「三晩庵雑誌」「三晩庵随筆」とも言う。通行本は、巻頭に橋口兼珍序及び橋口兼珍の叔父である橋口某の自序を付し、巻尾に宝暦12年(1762)閏四月の福昌寺の疎山の跋を付す。本書は、木村探元が80余歳(81-84)の時(宝暦9-12年、1759-62)に、橋口兼珍の叔父がその話を聞き書きし纏めたものである。江戸時代に出版はされなかったが、広く読まれた。記事は、全部で200条余り、絵画と茶の湯についてのことが中心である。図版は、「平野肩衝」について述べた部分である。茶道具には、古来有名で名前を有する「名物」と言われるものがある。特に千利休以前に遡るものは「大名物」と呼ばれ珍重された。平野肩衝は、天正年間(1573-92)の堺の茶人平野道是の所持していたもので、豊臣秀吉から島津義弘に贈られ、島津家代々に受け継がれ、現在、尚古集成館に所蔵されている。

代表的な「漢作唐物」(中国から輸入された)「大名物」である。ところが、平野肩衝は、享保16年(1731)桜田藩邸の失火で破損する。現在の平野肩衝は、粉々になった破片を灰の中からかき集め補修したものである。(高津)

書家としての探元

木村探元は、絵画ばかりでなく、書にも堪能であったとされる。『木村探元小伝』(公爵島津家臨時編輯所、1926年)緒言によれば、「探元は独り絵画のみならず、書に巧みにして深見玄岱及びその師独立の流派を括みて之を学び後明の瑞図を模してその風を得」と言い、探元自身の「世人何を以て余を画家と称して書家と称せざる」という言葉を伝える。深見玄岱(1649-1722)は、長崎の人で、その祖父は慶長初年に薩摩に渡来、儒医として薩摩藩に仕えた明の福建の人、父の代から深見氏を名乗り、父は薩摩藩を辞して長崎の唐通事となった。独立(1600-72)は、長崎にやって来た明の杭州の人で、長崎に渡来した隠元隆琦(1592-1673)に従って出家し、隠元の書記を務めた人物である。東晋の王羲之の書風を墨守する保守派に対して、唐の懷素を深く学んだ革新派とされる。探元の絵画作品に施された署名は、非常に個性的である。それは、明の張瑞図を学んだ成果と考えられる。張瑞図(1570-1644?)は、明末の書の四大家の一人である。万暦35年(1607)の進士で第三番であった。官は、礼部尚書、武英殿大学士に至ったが、宦官魏忠賢の派閥に属したため、失脚し罷免された。中国では宦官派ということで評価が低かったが、その極めて個性的な書は日本に伝わり大きな影響を与えた。(高津)

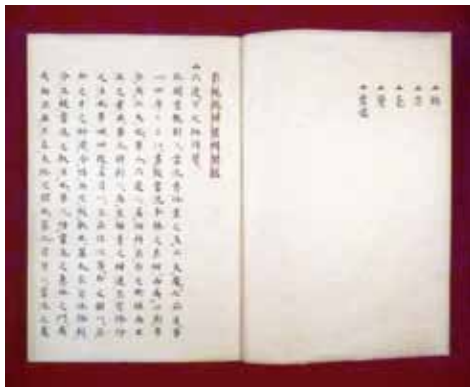


『中国美術全集』書法篆刻編5
明代書法(上海書画出版社、1989年)

武士としての探元

木村探元は絵師としての文事のほか、探元と知覧島津家島津久峰との問答集『白鷺洲』に見られるように、茶道・歌道にも造詣が深かった。その『白鷺洲』には示現流しげんや上杉謙信の逸話に言及した箇所もあり、探元の武士としての素養の一端がうかがえる。

ここでは島津家の剣法である示現流に関する資料と知覧島津家に仕えた家臣の甲冑を紹介する。(亀井)



「示現流聞書喫緊録」
(鹿児島大学附属図書館・玉里文庫)

示現流聞書喫緊録

久保之英編。大本2冊写(上巻欠、中巻・下巻存)。天明元(1781)年成。表紙は黄土色地に桐に丸十字紋の型押し表紙。全145丁。

示現流は東郷重位(1561-1643)が創始した剣術の流派である。示現流の奥義を伝える相伝書は、その多くが仏教・儒教の用語によって難解なものとなっているが、本書は示現流の思想や体系・奥義を平易に解説している。現存する中巻では、まず修行における心の持ち方について、地獄・餓鬼・畜生・修羅などに分けて論じ、下巻は打ち込みの基本(初段)を説く。(亀井)

自顕流系図

久保之英編。大本1冊写。寛政元(1789)年序、天明元(1781)年奥書。表紙は黄土色地に桐に丸十字紋の型押し表紙。内題「示現流聞書附録系図」。墨付119丁。示現流の正統、本家弟子など113名を列挙して、その略歴や示現流に関する事跡を載せる。本書は上記「示現流聞書喫緊録」の附録であり、奥書に次のようにある。(亀井)



「自顕流系図」
(鹿児島大学附属図書館・玉里文庫)

述喫緊録三冊。附録系図一冊。終詠一首。

末の世に誰此禄(ママ)を
手にとりて 解くおく意地
に我をしのばむ

天明元年辛丑十一月二十四日
五十二歳 久保七平衛紀之英書



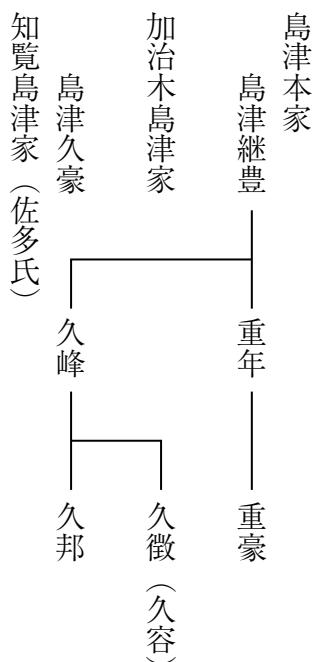
「黒絲威二枚胴具足」(ミュージアム知覧)

紺絲威二枚胴具足こんいとどしに まいどうぐそく (江戸時代、平山克己氏託)

知覧島津家に仕えた平山家おおよらいの大鎧。平山家は知覧武家屋敷庭園のひとつである平山克己庭園として一部公開され現在に続いている。

甲冑の兜たてものの立物(兜の鉢につける金物)は鬼面獅子。兜は32枚の鉄片をつなぎ合わせた三十二間筋兜で、主に上級武士が使用した。(亀井)

知覧島津家の文化



しまづ ひさたか 島津久峰

島津久峰は、薩摩藩家臣で、知覧島津家第18代当主である。久峰は、享保17年(1732)、藩主島津継豊の三男として生まれ、知覧島津家第17代当主島津久豪の養子となる。延享2年(1745)、久豪の死去により家督を相続する。宝暦3年(1753)、若年寄、谷山地頭職。宝暦9年(1762)月番国老として国政に参画。宝暦10年(1763)末吉地頭職。宝暦13年(1766)出水地頭職、同年、病を理由に職を辞す。明和9年(1772)6月没。(高津)

知覧文庫

知覧文庫は、島津久峰の旧蔵書を、その子久邦(1753-91)が鹿児島城下から知覧の地に移し、知覧文庫の朱印を押印して、郷校である菅徭館に保管したものである。しかし、維新前後の騒乱及び管理の不備、明治29年(1896)の火災のため、そのほとんどを失うことになった。(高津)

詩経

『詩経』の和刻本(日本で出版された中国書)である。『詩経』は、中国最古の詩集で、儒教の古典である五経(易経、書経、詩経、礼経、春秋)の一つである。訓点は、江戸時代前期の儒学者である山崎闇斎(1619-82)で、闇斎の弟子である京都の雲川弘毅(雲川春庵 名は弘毅。治兵衛と称す。別号は勞謙齋)によって改定が加えられている。図版は巻頭部分で、「知覧/文庫」印が右下に押されている。(高津)



『詩経』(ミュージアム知覧)

知覧文庫本『島陰漁唱』

現在、東京泉岳寺所蔵の桂庵玄樹『島陰漁唱』は、通行本よりも収録詩歌数が多く、最も優れたテキストとして知られるが、もともと知覧文庫の本で、知覧文庫から流出した後、大分県の古書肆を経て、京都の其中堂の所蔵となったものである。昭和10年10月、昭和天皇の鹿児島行幸の折り、造士館で開催された薩藩史料天覧に際し、知覧文庫本『島陰漁唱』二冊が展示されたが、これは京都の其中堂から借用したものという。当時の佐多操知覧町長が購入を図ったが、天覧を経たため高額になり、断念したという〔『知覧郷土誌』1962〕。「知覧/文庫」「其中/百品」の蔵書印があり、前者が知覧文庫の印、後者が其中堂の印である。(高津)

穀齋遺稿

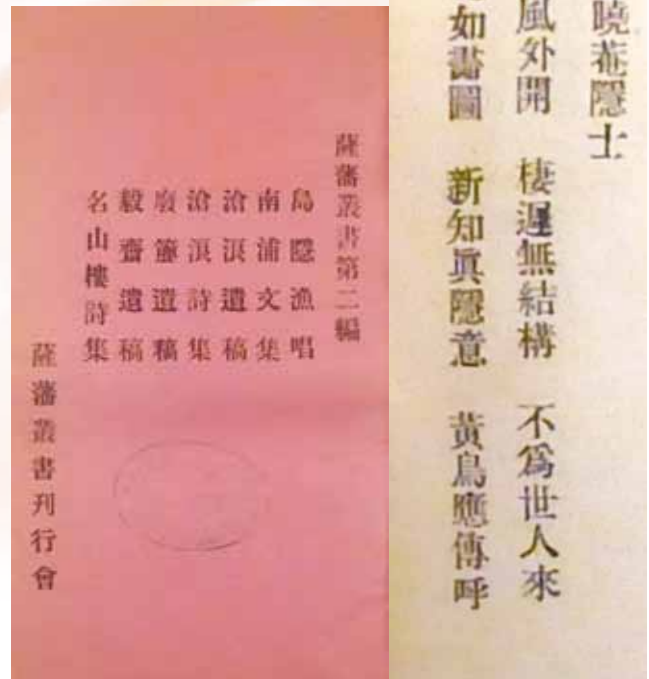
知覧島津家第18代当主、島津久峰（1732-72）の漢詩集である。明治39年（1906）に出版された『薩藩叢書』に収められている。原本ないしその写本の存在は現在知られていない。宝暦5年乙亥（1755）9月の詩に始まり、宝暦10年庚辰（1760）元旦の詩に終わる6年間（24-29歳）の詩が収められている。『白鷺洲』は、島津久峰が宝暦4年（1754）12月ごろから同10年（1760）7月まで木村探元の許に通い、茶の湯などに関する話を聞いた聞き書き記録で、この漢詩集の時期と重なる。探元関係の漢詩は、宝暦8年（1758）春の「新年訪三暎庵隱士」二首、同年7月18日の探元80歳の誕生日のための詩「賀三暎庵靜隱叟八十壽旦」一首がある。（高津）

新年 三暎庵隱士を訪ふ

其の一

新歲舊扉梅、 新歲旧扉の梅、
余香風外開。 余香は風外に開く。
棲遲無結構、 棲遲として結構無く、
不爲世人來。 世人の為に来らず。

（新年を迎えて、昨年から変化のない探元殿の古い門扉にも、梅の花がほころび、その馥郁たる香りを漂わせ、風の当たらないところでひっそりと咲いております。この梅のように、探元どのは静かな生活を送られ、豪華な造りの建物も無く、世間の人々のために出てくることもありません）



『穀齋遺稿』（鹿児島大学附属図書館）

島津久峰と探元

『白鷺洲』は、知覧島津家第18代当主、島津久峰（1732-72）が、藩の役職として若年寄を担当していた宝暦4年（1754）12月ごろから同10年（1760）7月まで木村探元の許に通い、茶の湯についての聞き書きをまとめたものである。この時、76歳の探元は既に隠居していた。久峰から見ると、探元は53歳の年長であった。『白鷺洲』は、聞き書きの日付を詳細に記述しているが、最初の日付である宝暦4年（1754）12月6日以前に14条の記事があるので、それ以前に聞き書きは始まっていたのであろう。久峰は、少なくとも、7年間で55回探元のもとに通い、596条の聞き書きをしている。（高津）

知覧の庭園文化

日本の庭園

日本の庭園文化には、二つの類型がある。回遊式庭園と露地（茶庭）である。

回遊式庭園は、大きな池を中心に、周囲に園路を巡らすもので、築山や池中の小島、橋などで自然景や名勝を再現しており、園路の所々に茶亭、東屋などを設けたものである。室町時代の禅宗寺院である天竜寺の庭や江戸時代の大名庭園である桂離宮（17世紀半）の庭園などが代表的である。

露地（茶庭）は、茶室に付随する庭で、茶室へと繋がる通路として成立（都市部の町屋で発達）した。千利休は、山村、田園風景の再現である草庵風の庭園を理想とした。露地を決定づける3つの石造物は、飛石、手水鉢、石灯籠であり、その他、腰掛待合、蹲踞（背の低い手水鉢と役石）なども露地の風景を構成する重要な要素である。（高津）



『都林泉名勝図会』（鹿児島大学附属図書館・玉里文庫）

武家茶道の展開

江戸時代に入り、町屋を中心として発達した露地の庭園が、武家茶道の展開とともに、武家屋敷に対応、拡大していく。古田織部（千利休の高弟、徳川秀忠の茶道指南）などの活動が有名であるが、曲がり角や垣根を配して、景色の変化を創作し、回遊式庭園の要素であった築山、池を取り入れていった。こうして、茶室の庭園としての露地は大きく変化した。不作為（利休）から作為（織部）への転換である。飛石も、小さい丸石から、デザイン性の勝る大きな切石へ変わり。異質なものとしての織部灯籠（キリシタン灯籠）が露

地の風景に入っていた。露地の拡大としての回遊式庭園には、小堀遠州による大徳寺、二条城二の丸庭園、寛永度仙洞御所庭園などが有名である。（高津）

庭園文化の地方伝播

江戸中期以降。庭園文化は、三都（京、大坂、江戸）から地方へと広がって行き、同時に、上層階級から中下の階層へと広がっていく。その時、大きな働きをしたのが、秋里籬島『都林泉名勝図会』（名園紹介、1799刊）と『築山庭造伝』（作庭書、前編1735刊、後編1829刊）の二著作で、前者は京都の庭園を絵図で網羅的に紹介した書物、後者は具体的な庭造りの指南書である。（高津）

鹿児島の庭園文化

鹿児島にあっては、磯の仙巖園が回遊式庭園の代表で、島津光久（19代当主）が、万治元（1658）年、御仮屋を築いて「仙巖園」と名付けたのに始まる。また、露地と回遊式庭園とが連携、接続した庭園としては、旧島津氏玉里邸庭園の下御庭がある。島津斉興が、天保6年（1835）につくった庭園である。（高津）

知覧の庭園文化

重森三玲・重森完途『日本庭園史体系』江戸中末期の庭によれば、知覧の武家庭園は、寛保年間（1741-44）前後の作であると推定されている。知覧庭園は大部分が池庭式の枯山水様式で、山形の大刈込の背後に、さらに大刈込を配した二重の大刈込が特徴的である。また、立石組の手法（桃山時代の石組）が見られるという特徴もある。町全体は、各戸ごとの野面積石垣とその上に連続する大刈込籬が続き、美しい景観を構成している。（高津）



佐多忠直氏庭園

佐多忠直氏庭園

書院の前庭となっている。書院から見て右斜めに、この庭園の中心となる枯滝石組が配される。背景は連山式の大刈込で、北東角に蓬莱山としての巨石を置き、順次低い石を2つ重ね、右に自然石灯籠、左に三重の塔を配する。左手にも高い石を中心に石組が構成されている。庭石は万之瀬川上流から取り寄せた凝灰岩で、変化に富む奇岩である。知覧庭園の中でも初期に属すると推定されている。（高津）

佐多美舟氏庭園

前方に大刈込の連山、東南角に滝石組みを配した枯山水庭園である。来客は門を右に折れると、書院の前から庭の全景を一覧でき、書院からは左斜めに庭園を見る配置となっている。中門右前方に長方形の切石（拝石）が配され、ここから庭園の石組みを見ることになる。豪快な立石による滝石組が特色となっている。（高津）



佐多美舟氏庭園



平山亮一氏庭園

平山亮一氏庭園

知覧の庭園中、本庭園は、大刈込だけの枯山水という異色の庭園である。作庭の時代は降って天明年間（1781-89）と言われる。外は、野面積石垣で、上部を大刈込籬が覆い、門を右に折ると、北側が書院、南側が庭園となっている。北東部に手水鉢を配し、大刈込の前面に四角柱状の石を10個直線上に配している。柱状の石は、盆栽を置く台とされる。南方の遠山の景色をそのまま庭まで延長させる借景となっている。（高津）



「白鷺洲（部分）」木村探元述 島津久峰編
鹿児島大学附属図書館蔵

平成二十六年鹿兒島大学貴重書公開

木村探元と武家のたしなみ

編者 高津 孝 (法文学部)

執筆者 高津 孝 (法文学部) 丹羽 謙治 (法文学部)

金井 静香 (法文学部) 亀井 森 (教育学部)

発行者 鹿児島大学附属図書館

発行日 平成二十六年十二月一日

